

いつの間にかサラリーマンになっていた。立ったまま寝る通勤電車も少年ジャンプを読むおっさんにも慣れっこになっていた。まさかと思うじゃん。もう慣れた。慣れたよ。

もしも誰かが「世界を征服しに行こうぜ」って言ってくれたら履歴書もスーツも全部燃やして今すぐ手作りのボートを太平洋に浮かべるの。こういう日に限ってお前からメールは来ないんだもん。

俺はお前がそう言ってくれるのをずっと待ってたんだぜ？でも世界征服なんて無理だもの。サラリーマンより忙しいもの。

別に偉くなりたくないわけでもないもの。「もしも」あ、俺だけと最近なにやっつてんの？

「いやちょっと最近迷路にはまっちゃまってさあ、すぐに抜け出せると思ってなかなかそうもいなくて、あ、でもさつき道を聞いたら交差点で迷った。左に曲がれば大丈夫だって言ってたから、もうきつと、きつと。」

「なんだ、早くしろよ、みんな待ってるぜ」って言ったところで俺は切符もあいつは帰ってこないんだってことが、はつきりとわかった。もしもお前が世界征服しに行こうって言ったら

履歴書もスーツも燃やしてすぐにでも太平洋にくだしたよ。なのにそういう日に限ってお前はメールをよこさないし。買ったCDも返ってこないままだ。

俺はお前がそういつてくれるのをずっと待ってたってゆうのにも。もしよせん世界征服なんて無理だし。サラリーマンより忙しいし偉くないわけではないから

知りたくない。知りたくない。知りたくない。何も知りたくなく。いくら知識がいつたって

一回のポエトリーリーディングにはとてもじゃないけど勝て。果てが無くせに時おり夢をちらつかせてくる人生や。一日限りの運勢や。

どうにも抵抗できない運命みたいなものをいっしょくたにかかると。宛名のない手紙を書き続ける人間の身にもなってみろよ。

「もしも」俺だけとみんな待ってるぜ？

「あ、すまんすまん言われた通りに交差点に出るたびに左に曲がらんたけど。なかなか抜けられなくて、でも大丈夫だよ、きつと、すぐだよ。」

「いやお前それってさ、思うんだけど...」

ってところで電話は切れて結局何も伝えられない。詩や歌にするのはとても簡単なのに。

直接言葉で伝えることがこんなにも難しいことだと知らなく。それなのに知らなくていいことばかり増えてしまっつて。

自分の一番近いところにある風景がこんなにもかすんでしま。人生がもし流星群からはぐれた彗星のようなものだとして

とお前は言ったんだ。

「俺たちはもうどこから来たのかもわからなくらい遠くに来てしまったのかも知らないな。」

「そして、どこへ行くのかもわからない」と俺は付け加えた。

「まっくらな宇宙の中でどこかに進んでるってことだけははっきりと、わかる。」

人生はきつと流星群からはぐれた彗星のようなもので。行き着く場所なんてわからないのに命を燃やし続けるんだよ。だから、だから十年後のお前は今の俺を余裕で笑い飛ばしてくるって。十年後の俺は今の俺を笑い飛ばしてくるって。間違いないよ。

果てがないのに時おり夢をちらつかせてくる人生や。一日限りの運勢やどうにも抵抗できない運命をかかえて俺はまだ書き続けるから。詩を書き続けるから。やめないぜ。

# 世界征服やめた

萩原利久 藤堂日向

井浦新 (友情出演)

原案・主題歌:  
「世界征服やめた」

不可思議/wonderboy (LOW HIGH WHO? STUDIO)

企画・脚本・監督:  
北村匠海



原案：**不可思議/wonderboyの名曲** × 企画・監督・脚本：**北村匠海**

2つの才能が紡ぎ出す、かけがえのない命の輝き。

この世界に居場所を見つけられずに無力さが日に日に募る彼方。  
会社の同僚で、飄々として明るい性格の星野。

ふたりの日常は、星野が選んだ決断によって大きく揺れ動いていく——。

幼少期から芸能の道を生きる北村監督が高校時代に出会い、「人生を変えてくれた」と感謝をささげる**不可思議/wonderboy**の楽曲を原案に、自ら企画・脚本を兼任した念願の1本にして短編映画初監督作、それが『世界征服やめた』だ。その渾身の企画を体現する仲間として声をかけたのは、現象化した「美しい彼」シリーズや『キングダム』シリーズ、そして映画『ミステリと言う勿れ』といった話題作に次々と出演を続ける**萩原利久**。そして『東京リベンジャーズ』シリーズや『遺書、公開。』(2025年1月31日公開予定)などで頭角を現す**藤堂日向**。萩原はかつての快活さや気力をいつしか見失ってしまった彼方の壊れかけた哀しみを佇まいから存分に漂わせ、藤堂は前半では気安さ、後半ではありっただけの痛みを放出する硬軟織り交ぜた熱演で観る者を引き込む。加えて、北村のオファーを快諾した**井浦新**が友情出演。製作陣には、北村と『スクロール』やDISH//の「プランA」MVで組んだ映像作家・清水康彦、フォトグラファーとしてポカリスエットの広告から映画『正体』撮影まで手掛ける川上智之といったトップクリエイターが集結した。

多才な面々との協働で北村が監督として開花させたのは、世界観の構築——いわば総合力の高さ。セリフに頼らず、雄弁な余白や沈黙で等身大の“傷”を画面に宿らせる絶妙なストーリーテリング、彼方と星野以外の人物が静止するストップモーション的なシーンに象徴される遊び心、東京の街や会社の中にぼつんと人物を置き、引きのカメラで孤独感を演出する画作り、彼方×星野と足並みを揃えながら、一切の無駄を感じさせない締まった構成ほか、百戦錬磨と見紛う完成度を見せつける。日本映画界を引っ張るトップ俳優にして、監督として踏み出した“大型新人”の鮮烈なるデビュー、その命の輝きを余すことなく受け止めていただきたい。(テキスト=SYO)



【公式サイト】

2025.2.7(金)

ヒューマンラストシネマ渋谷  
池袋 HUMAX シネマズ | アップリンク 吉祥寺